

一九八四年（昭和五十九年）八月十四日のことである。日本三大霊山の一つ、富山の立山山頂に一人の男性が立っていた。そこは立山連峰の北側にある別山で、谷をへだてた前方には、いくつものものがった峰で構成される剣岳がそびえていた。男はその剣岳に向かい手を合わせて祈っていた。男の脇には同行の女性が座っており、神から下されるお言葉を手帳に書き記していた。

光の剣をたくします

輝かすもそなた

さびらすもそなた

ますます励んでいただきたい

光の剣のその先が

星の光とつなぐとき

万願成就いたします

祈っていた男の右手が上方に伸びたかと思うと、剣をつかみ取って握る形になった。左手は一度下に降ろされたが、すぐ腹部の右側に当てられた。神と人間の間でひそかになされた神剣授受のこの儀式は、ハルマゲドン（世界最終戦争）へ

向けて激動していた世界を、新しい方向へ導くための重大な意味を含んでいた。神界から地球新生の役目を託されたこの人物は、日本各地の山々を巡り歩く神道系の求道者で、このとき四十一才、本格的にこの道に入ってから十年あまりの時間が過ぎていた。

このとき剣岳山頂には、加賀の白山のシラヤマヒメ大神が出向いており、彼はその女神に向かつて祈っていたのであった。そして、純白の衣に身を包んだシラヤマヒメ大神より、彼は白山神界に古くから伝わる「光の剣」という神剣を授かったのであった。日本には白山とか白峰、あるいは白岳、白根山などと呼ばれる山が各地にあるが、シラヤマヒメとは、そうした白山系の山々にある神界を統轄する神なのである。そして、シラヤマヒメは母神の頂上神であって、日本神話ではイザナミノミコトとも呼ばれている。剣岳には神界における剣の管轄権を持つている剣神界があつて、その頂上神はツルギヒメと呼ばれている。その山にわざわざ白山の神が出向いて来て、人間に「光の剣」を授けたのは、剣神界の承認を得たうえで正式な儀式であることを示す必要があつたからだろう。

白山神界は、宇宙の母性原理を地球神界で代表しているが、その白山神界の剣が一人の求道者に授けられたことは、人間には測り知れないほどの重大な意味が含まれていた。そしてさらに注目すべきことは、その求道者のミタマ（魂）がスサ

ノヲ系統であつたといふことである。人間の魂といふものに関しては、立場によつていろいろならえ方、考え方があつて一概には言えないが、神道では、人間のミタマ（魂）は神から分け与えられたものであると考えられている。その考え方から言うと、この男性はスサノヲという神から分け与えられたミタマの持主であり、人間世界において、スサノヲ大神の意志を代行する役目を負わされている、と言ふことができるのである。表現を換えれば、人間界におけるスサノヲの化身である、と言つてもさしつかえない。そのスサノヲ人間に神界の母神は、地球再建の権威を持つ「光の剣」を授けたのであつた。

神レベルでのそうした不思議な儀式が行われていたちよつどそのころ、出雲地方の一閑村の山のふもとから、大量の銅剣が発掘されていた。過去日本全国で発掘された銅剣の総数をはるかに上まわる三百五十八本の銅剣と、十六本の銅矛、そして六個の銅鐸が出土したとき、古代出雲王朝の謎をめぐつて数々の論議が巻き起こつた。簸川郡斐川村というそのあたり一帯は、八叉の大蛇退治で有名なスサノヲゆかりの地であり、遺跡を守るようにしてひそかに祭られていた荒神といふのもスサノヲの別名なのである。古代出雲王朝が、アマテラスオオミカミを奉載する大和朝廷によつて圧迫支配されたといふそのことの証拠が、このスサノヲの名の下に封じ込められていた銅剣や銅矛、銅鐸ということにもなるであらう。

立山山上でスサノヲ人間がシラヤマヒメ大神から神剣を授かった、その時に合わせるように発掘された荒神谷の銅剣。アマテラス大神の封印を解かれて再び人間社会に、かつての出雲王朝の権威が現れ出したことは、神界から人間世界への重大な通知であり、暗示であったのである。そして、古代の輝きに満ちたこの出雲の閑村こそが、シラヤマヒメ大神から神剣を授かったスサノヲ人間の出生の地であった。

後略